

父親から子への愛着の検討

——イクメン意識と育児参加に焦点を当てて——

竹谷 玲香*・桂田恵美子**

抄録：本研究では、父親の育児参加頻度や育児時間とイクメンである意識が子どもへの愛着に関連するかを検討した。先行研究を基に、父親の育児参加度（頻度や時間）の高さは、イクメン意識を高めるとともに、子どもへの愛着を強めるという予測を立てた。質問紙を用いて、未就学児の子どもを持つ父親を対象に、子どもへの気持ち（愛着）、養育態度、育児従事度、イクメンかを問う調査を行った。分析の結果、イクメンであると思っている父親の方が、そうでない父親に比べて育児頻度が高く、子どもへの養育態度が暖かく、子どもへの愛着も強いことが示された。また、媒介分析の結果、育児参加頻度の高さがイクメン意識を媒介として子どもへの愛着につながることが確認された。本研究は父親のみを対象としたため、質問紙の回答には客観性が欠ける。今後の研究では、母親にも父親の育児参加度を問うことが必要と考えられる。

キーワード：父親、愛着、育児参加、養育態度、イクメン

乳幼児は、自分の身が恐怖や危険な状況に置かれた時、養育者に安全を求め守ってもらおうと行動する。この行動システムは、Bowlbyによって「愛着 (attachment)」と名付けられている (山川, 2006)。Bowlbyは、「愛着」とは子どもと養育者の親密で継続的な情緒的な繋がり、また、愛情の絆であると述べており、乳幼児は安心感を与えてくれる養育者に対して愛着を形成する (小泉・齋藤, 2015)。これまでの子どもの愛着に関する研究は、母子関係が中心であり、子どもと父親を対象とする研究は少ない。しかし、近年では子どもの発達や家庭における父親の存在が重視されており、父親に関する研究が増加しつつある (岐部, 2018)。

菅原他 (2002) は、両親と9歳から11歳の子どもを対象に、夫婦関係、親の養育態度と子どもの抑うつとの関連を研究している。その研究では、夫婦関係と母親の養育態度は子どもの抑うつに関連するが、父親の養育態度は母親に対する愛情のみに関連し、子どもの抑うつと直接の関連が見られないことが示された。菅原らは、父親の養育態度の関連が母親のみで、子どもに見られなかった可能性として、父親の子どもとの接触時間の少なさを挙げている。また、永井 (2004) は、小学校高学年から高校生の子どもの持つ家庭を対象に、親と子どもが認識する父子関係と母子関係の違いと、子どもの性別による親子関係の違いを分析している。その結果、親と子どもはどちらも、性別に関わらず父子関係よりも母子関係の方が強いと認識していることが示されている。この結果の背景にも、父親の子どもとの接触時間の少なさが関

連しているだろう。父親は子どもと過ごす時間が少ないと指摘する研究は多々存在する (例えば、冬木・佐野, 2019; 田所・大塚, 2015)。

それでは、どれほど父親は子どもと関わる時間が少ないのだろうか。日本では、高度経済成長期から、女性の主婦化が進み (片桐, 2016)、「男性は仕事、女性は家庭」といった固定的な性別役割分業観が存在している (笹川・池松・小関・北原, 2015)。共働き世代が半数を超える現代においても、男性は会社を支える存在として期待されており、父親は「家庭より仕事」という考え方がいまだに定着している (杉山・小林・石原, 2019)。家庭を安定させるために父親が労働時間を増やすと、家事・育児に意欲的な父親でも、家事・育児を行う時間が無く、性別役割分業が徹底されてしまう (相馬・武島・中村・吉沢, 2021)。実際、厚生労働省の雇用均等基本調査によると2019年度までの育児休業取得率は、女性8割に対し、男性は一割にも満たない低い数字であった。また、育児休業を取りたいと思っても、取得出来ない男性は37.5%であり、他の先進国に比べて家庭での家事・育児に関与する時間は最低水準である。これらのことから、家庭に関与したいと思う父親であっても、仕事の関係により家事育児に関与する時間が限られるため、母親に比べて幼少期の子どもとの接触時間が圧倒的に少ない状況にあることが窺える。

以上のような背景から、母親と父親が共に仕事と育児を両立出来るよう支援するために、2010年6月に厚生労働省の雇用均等・児童家庭局が「イクメンプロジェクト

*関西学院大学文学部総合心理科学科4年

**関西学院大学文学部教授

ト」を発足した。このプロジェクトの定義によると、イクメンとは、子育てを積極的に行う男性であり、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のことである。イクメンプロジェクトとは、働く男性の育児への積極的な参画や、育児休業取得のために社会の気運を高めることを目的としたプロジェクトである（厚生労働省、2010）。実際、イクメンプロジェクトの影響を受け、父親の育児に対する意識は高まりつつあるとデッカー・丸山（2015）は述べている。父親の育児休業取得率は低い数字ではあるものの、2012年から増加傾向にある。2021年8月に発表された厚生労働省の雇用均等基本調査によれば、2020年度の男性の育児休業取得率は12.65%であり1割を上回った。イクメンという言葉が一般市民に浸透してきており、父親が家事・育児を積極的に行うことが社会的に望ましいという考えが広まってきている現代において、イクメンを自認する父親も増えて来ている。そこで、本研究は、イクメンであると思っている男性とそうでない男性を比較し、イクメン意識が実際の育児参加頻度や育児時間に反映されているのかを検討する。

父親の育児参加は子どもにとっても、父親自身にとっても良い影響があることが研究で示されている。数井・無藤・園田（1996）の研究では、子どもの発達には親子関係だけでなく夫婦関係も影響し、父親の母子への支援は子どものより良い成長に繋がることが示されている。岐部（2016）は、発達において親の影響が大きいと考えられる就学前の子どもがいる家庭を対象として、育児参加を軸に、父親の抑うつと、父子関係や夫婦関係、母親の抑うつや子どもの社会情緒的発達との関連を調査した。その結果では、父親の抑うつ傾向の高さは育児参加の低さと関連し、父親の育児参加の高さは夫婦関係と父子関係にポジティブな関連があることが示された。また、デッカー・丸山（2015）の研究でも父親の育児参加は夫婦関係の親密度を高めることが言われている。以上のことから、父親が積極的に育児や家事を行うことは良好な夫婦関係を築くことに繋がり、そこから間接的に子どもへの健全な発達に繋がると考えられる。

しかし、これまでの研究では、夫婦関係など母親を通して父親の子どもへの影響が言われることが多く、父親の子どもへの直接的な愛着などを取り扱った研究は少ない。その少ない研究の一つに、三井（中浦）・喜多（2005）がある。三井らは、生後3か月以内の第1子をもつ父親を対象に、父親の子どもへの愛着の要因を検討している。そして、家事・育児の参加や母親への支援が多いほど子どもへの愛着が強いことを報告している。母親と同じで父親も、早い段階での子どもとの接触や育児は、子への愛着に影響を及ぼす（村田・山口・堀田、2016）。このことから、育児参加の度合いが高い父親は、参加度合いが低い父親よりも子どもへの愛着が強くなる

ことが考えられ、父親の育児参加はより良い父子関係を築くことに繋がると考えられる。そこで本研究では、父親の育児参加や子どもと接する頻度や時間がイクメン意識を高め、子どもへの愛着に影響するのかを検討する。

以上のことから本研究は、就学前の子どもを持つ父親を対象に、育児参加やイクメンであるという意識が子どもに対する愛着に影響するか検討することを目的とする。先行研究から、育児参加度が高い父親は低い父親よりイクメン意識が高く、子への愛着も強いことが予測される。なお、本研究において、父親の愛着は父親の子どもに対するポジティブな感情として定義された。

方 法

調査参加者

西宮市の4つの公立保育園、6つの私立保育園に在籍する3歳から6歳の園児の父親を対象として質問紙を配布した。父親344人に配布し142人から回収された（回収率41.3%）。そのうち調査内容に記入漏れのない132人のデータを分析対象とした。

父親の平均年齢は39.07歳（SD:4.90、範囲:25~50歳）、職業形態は「会社員」101名、「公務員」24名、「団体職員」1名、「自営業」4名、「その他」2名であった。1週間の就業時間の平均は、47.09時間（範囲:35~100時間）であった。育児休業取得有無で「有」と答えたのは43名、「無」と答えたのは89名であった。家族構成は、「核家族」123名、「拡大家族」7名、「その他」2名であった。母親の平均年齢は37.58歳（SD:4.71、範囲:25~50歳）、職業形態は「専業主婦」2名、「フルタイム」88名、「パートタイム」32名、「その他」10名であった。子どもの平均人数は2.01名（SD:0.77、範囲:1~6名）、平均年齢は5.28歳（SD:3.03、範囲:0~15歳）であった。

調査内容

本調査で用いた質問紙は、フェイスシート、父親の平日と休日の家事・育児時間、父親の子どもへの愛着、父親の養育態度、父親の育児従事度、イクメンであるかを問う質問で構成されていた。質問紙中の「子ども」は、質問紙を配布した幼稚園・保育園に通う子どもを指すことを明示した。

(1) フェイスシート

父親の年齢、職業、1週間の就業時間、子どもの人数と年齢、家族構成、妻の年齢、妻の職業形態、育児休業取得の有無、有の場合取得した期間、無の場合取らなかった理由を尋ねた。

(2) 平日と休日の1日の家事・育児時間

父親の1日の家事・育児時間を「0~1時間（1点）」、「1~2時間（2点）」、「2~3時間（3点）」、「3~4時間

(4点)、「4~5時間(5点)」、「5時間以上(6点)」の6件法として、平日と休日に分けて回答を求めた。

(3) 父親の子どもへの愛着

父親が自分の子どもに抱く情緒的絆を測定するためにボンディング質問票を使用した。この質問票は、イギリスの研究者によって開発されたものであり、鈴宮・山下・吉田(2003)によって日本語訳されている。本来は母親が赤ちゃんへの気持ちを測定する尺度であるが、内容的には幼稚園児・保育園児を持つ親にも適用できると判断し、使用した。本研究では3~6歳の子どもを持つ父親が対象であるため、質問項目の「赤ちゃん」を「子ども」に変換して使用した。質問項目は「子どもを愛おしいと感じる」「子どものことが腹立たしく嫌になる」などであった。「(1) あてはまらない」から「(4) あてはまる」の4件法で回答を求めた。点数が高いと否定的な感情が強い、情緒的な絆を感じていないことを示すように逆転項目を調整した。つまり、本尺度の得点は愛着の低さを示すことになる。本調査におけるこの尺度の信頼係数は $\alpha=.69$ であった。

(4) 父親の養育態度

この尺度は、菅原他(2002)がParker, Tupling & Brown(1979)のParental Bonding Instrument(PBI)を自分の子どもへの態度を測定するものに変換し作成したものである。尺度は「養育態度の暖かさ」10項目と「過干渉傾向」6項目の2つの下位尺度から成る。菅原他の先行研究では9~11歳の年齢の子どもを対象として作成している。本研究では3~6歳の未就学児の子どもを対象としているため、年齢に合わないと判断した過干渉傾向の尺度と、養育態度の暖かさの「この子が抱えている問題や悩みに理解を示している」の1項目を削除し、養育態度の暖かさの9項目のみを用いた。また、先行研究では子どもを「この子」と表現しているが、本研究では「子ども」に変換して使用した。質問項目は、「よく子どもに微笑みかけている」「子どもに優しい」などであった。「(1) 全く該当しない」から「(4) 該当する」の4件法で回答を求めた。点数が高いほど、養育態度が暖かいことを示す。本調査におけるこの尺度の信頼係数は $\alpha=.88$ であった。

(5) 父親の育児参加

父親の育児参加については、朴ら(2010)の育児参加測定尺度を用いた。質問は「子どもと一緒に室内で遊ぶ」などの10項目で構成されているが、10項目目の「看病をする/病院に連れていく」という質問が、回答者がコントロールできない状況(子どもが病気がちかどうか)によって参加頻度が異なる可能性があるとして省いた。したがって1項目を除いた9項目を「していない(0点)」から「毎日・毎回している(4点)」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど育児参加の頻度が高

いとした。本調査におけるこの尺度の信頼係数は $\alpha=.82$ であった。

(6) 主観的イクメン尺度

イクメンの定義「イクメンとは、子育てを積極的に行う男性、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性。また、将来そのような人生を送ろうとしている男性を指す(厚生労働省 online)」を記載し、自分がイクメンであると思う程度を聞いた。「他人がどう見るかではなく、あなた自身がどう思うかを答えてください。」という指示のもと、「(1) 全く該当しない」から「(4) 該当する」の4件法で回答を求めた。

手続き

データ収集の期間は9月下旬から10月下旬であった。西宮市内の公立・私立の保育園・幼稚園に質問紙調査の協力を依頼した。協力が得られた10園に質問紙を持参、または郵送し、園の職員に幼稚園・保育園に通う3歳児から6歳児の保護者に質問紙の配布を依頼した。質問紙は父親用と記載した表紙を付け、配布用封筒に返信用封筒を入れ配布した。保護者に自宅にて回答後、返信用の白封筒に入れて園に返すよう依頼し、約2週間後、各園に直接訪問し回収した。

データ分析は、清水(2016)によるMicrosoft Excel上の統計分析用プログラムHAD16_302で行った。

結 果

(1) イクメン意識と育児参加の関連

主観的イクメン尺度の結果から、イクメン群と、非イクメン群に分類した。主観的イクメン尺度の「あてはまらない」「ややあてはまらない」を選択した64名を非イクメン群、「あてはまる」「ややあてはまる」を選択した68名をイクメン群とした。

イクメンである意識が育児参加頻度と関連するか検討するために、イクメン各群の育児参加平均得点に関して t 検定を行った。その結果、イクメン群の育児参加得点は非イクメン群よりも有意に高かった($t(130)=-2.91$, $p<.05$, $d=-0.50$)。Figure 1に各群の育児参加得点を示した。縦軸は育児参加得点、横軸はイクメン意識の各群、エラーバーは標準誤差を示している。

次に、平日と休日の育児時間がイクメン意識によって異なるのかどうかを検討した。平日の平均育児時間得点はイクメン群2.19(2時間以上3時間未満)、非イクメン群1.83(1時間以上2時間未満)であった。休日の平均育児時間得点はイクメン群4.69(4時間以上5時間未満)、非イクメン群4.13(4時間以上5時間未満)であった。

各群の平日の育児時間得点に関して t 検定を行った。その結果、平日の育児時間はイクメン群の方が長いと言

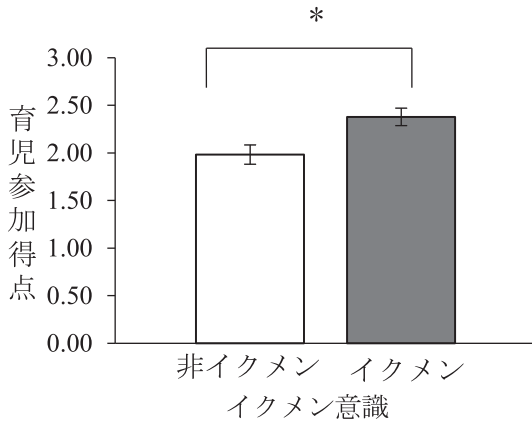


Figure 1 各群における育児参加得点。エラーバーは標準誤差を示す。

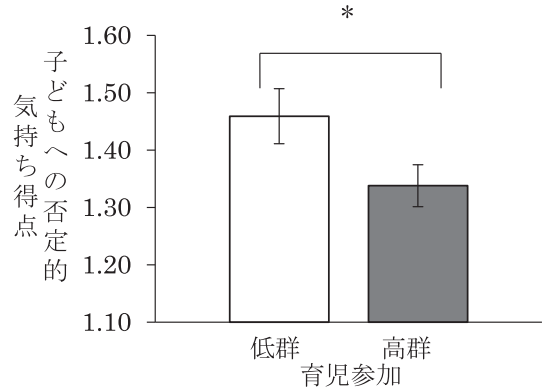


Figure 3 各群における子どもへの否定的気持ち得点。エラーバーは標準誤差を示す。

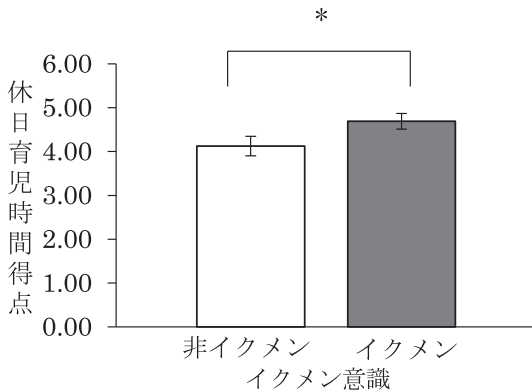


Figure 2 各群における休日育児時間得点。エラーバーは標準誤差を示す。

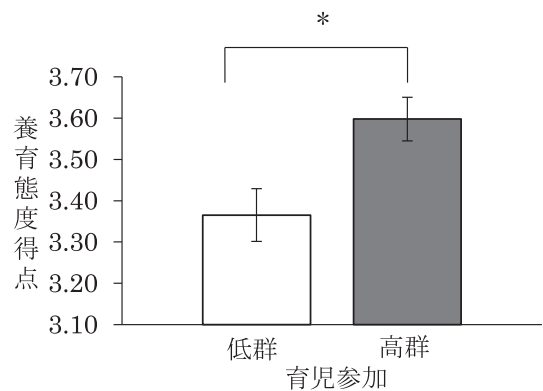


Figure 4 各群における養育態度得点。エラーバーは標準誤差を示す。

う有意傾向が見られた ($t(130) = -1.87, p = .06, d = -0.32$)。休日の育児時間得点に関して同様の分析を行った結果、イクメン群の方が非イクメン群より育児時間が有意に長かった ($t(130) = -1.99, p < .05, d = -0.35$)。Figure 2 に各群の休日の育児参加時間得点を示した。縦軸は育児時間得点、横軸はイクメン意識の各群、エラーバーは標準誤差を示している。

なお、育児参加頻度と平日、休日の育児時間との相関分析を行ったところ、平日の育児時間とは中程度の強い相関 ($r(130) = .52, p < .001$)、休日では弱い相関が見られた ($r(130) = .37, p < .001$)。

(2) 父親の育児参加頻度と子どもへの否定的気持ち、養育態度との関連

育児参加測定尺度9項目の平均値を算出した。平均値の2.19点以上の66名を育児参加の頻度が高い群(以下、育児参加高群)、平均値未満の66名を育児参加の頻度が低い群(以下、育児参加低群)に分類した。

育児参加の頻度が子どもへの否定的気持ちと関連するのか検討するために、各群の子どもへの否定的気持ち得

点について t 検定を行った。その結果、育児参加低群の父親の子どもへの否定的気持ち得点は育児参加高群の父親よりも有意に高かった ($t(130) = 2.01, p < .05, d = 0.35$)。Figure 3 に各群における子どもへの気持ち得点を示した。縦軸は子どもへの否定的気持ち得点、横軸は育児参加各群、エラーバーは標準誤差を示している。

次に、育児参加頻度が養育態度に関連があるか検討した。育児参加各群の養育態度平均得点に関して t 検定を行った。その結果、育児参加高群の父親の養育態度得点は育児参加低群の父親よりも有意に高かった ($t(130) = -2.80, p < .05, d = -0.49$)。これにより、育児参加の頻度が高い父親の方が養育態度が暖かいことが示された。Figure 4 に各群における養育態度得点を示した。縦軸は養育態度得点、横軸は育児参加各群、エラーバーは標準誤差を示している。

(3) イクメン意識と子どもへの否定的気持ちの関連

イクメン意識が子どもへの否定的気持ちに関連するのかを検討するために、各群の子どもへの否定的気持ち得点に関して t 検定を行った。その結果、非イクメン群

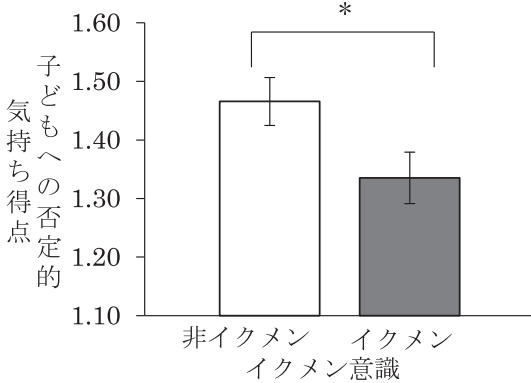


Figure 5 各群における子どもへの否定的気持ち得点。エラーバーは標準誤差を示す。

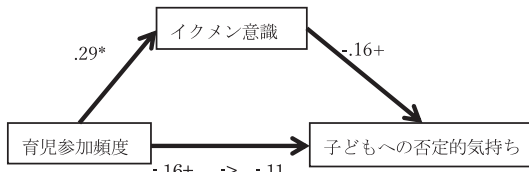


Figure 6 育児参加頻度がイクメン意識を媒介して子どもへの愛着へ影響を及ぼすモデル
 間接効果： $b = -0.01$, 95% CI $[-0.054, -0.002]$
 $**p < .01$, $*p < .05$, $+p < .10$

の子どもへの否定的気持ち得点は、イクメン群よりも有意に高かった ($t(130) = 2.16, p < .05, d = 0.38$)。この結果から、イクメンであると思っている父親の方が、子どもへの否定的な気持ちが低い、すなわち、愛着が強いことが示された。Figure 5 に各群における子どもへの否定的気持ち得点を示した。縦軸は子どもへの否定的気持ち得点、横軸はイクメン意識の各群、エラーバーは標準誤差を示している。

(4) 媒介分析

育児参加頻度が子どもへの愛着に及ぼす影響についてイクメン意識が媒介するかを確認するために媒介分析を行った。子どもへの否定的気持ち得点を目的変数、育児参加頻度を説明変数にした回帰分析を行った。その結果、育児参加頻度の子どもへの否定的気持ちへの予測は有意傾向であった ($\beta = -.16, b = -0.07, SE = 0.04, t(130) = -1.84, p = .069$)。その回帰分析の説明変数にイクメン意識を追加した結果、イクメン意識の効果は有意傾向 ($\beta = -.16, b = -0.06, SE = 0.03, t(129) = -1.80, p = .074$) であり、育児参加頻度の効果は有意傾向から非有意に変化した ($\beta = -.11, b = -0.06, SE = 0.04, t(129) = -1.24, p = .216$)。間接効果の検定 (Bootstrap 法, 2000 回) の結果、95% 信頼区間 $[-0.054, -0.002]$ は 0 を含んでおらず、イクメン意識の有意な媒介効果は認められた (Figure 6 参照)。なお、イクメン意識を説明変数、育児

参加頻度を媒介変数とした場合は、間接効果： $b = -0.02$, 95% CI $[-0.04, 0.005]$ で媒介効果は認められなかった。

(5) イクメン意識と育児休業取得の関連

イクメン意識と育児休業取得の有無の間に関連があるか検討するためにカイ 2 乗検定を行ったところ、両者の間に有意差は見られなかった ($\chi^2(1, N = 132) = 0.003, p = 0.96$)。

第 4 章 考察

本研究は、父親の育児参加度 (育児頻度や時間) が高いほど本人のイクメン意識を高め、子どもに対してもより強いポジティブな感情 (愛着) を形成するのではないかという予測をたて、幼少の子どもを持つ父親に質問紙調査をおこなった。調査においては、子どもへの否定的気持ち (子への愛着の弱さ)、養育の暖かさ、育児参加度 (育児頻度と平日・休日の育児にかかわる時間)、主観的イクメン度を聞いた。

まず、イクメン意識と育児参加の関連を検討した結果、イクメンを自認している父親は、自認していない父親に比べて育児参加の頻度が高かった。また、休日の育児・家事時間に関しても、イクメンを自認している父親の方が長いという結果が得られた。しかし、本研究では父親の育児頻度や育児時間に関しては本人の自己申告であるため、客観性に欠ける。人前では育児に熱心なふりをして実質が伴わない「イクメンもどき」が存在するという (竹信, 2013) ことから、母親の視点からの父親のイクメン度を同時に測定する必要がある。

育児参加頻度と子どもへのポジティブな感情 (愛着) の関連の検討では、育児参加頻度が高い父親の方が低い父親より、子どもへの否定的な気持ちが低いという結果が得られた。このことから、育児参加頻度が高い父親の方が子どもへの情緒的結びつきが強いことが示された。三井 (中浦)・喜多 (2005) の、家事・育児参加頻度が高い父親の方が、子どもへの愛着が強くなるという結果と同様の結果であった。また、養育態度に関する分析でも、育児参加頻度が高い父親の方が子どもに対して暖かく接しているという結果が得られた。さらに、媒介分析の結果からは、育児参加頻度がイクメン意識を高め、それが子どもへの強い愛着につながるということが確認された。つまり、育児参加頻度の高さがイクメン意識を高め、子どもへの愛着を強めるという予測通りの結果となった。

これらの結果から、育児を通した子どもとの接触が多い父親ほど子どもへの愛着が強くなり、養育態度も暖かくなることが考えられる。育児は楽しいことばかりではなく、不快なこと大変なことも多いが、父親の子どもに対するやさしさや愛着は実際に子どもとかかわることから始まるということを本研究の結果は示唆している。

一方で、父親のイクメン意識と育児休業取得の有無とは関連が見られなかった。イクメンを自認していても、なかなか育児休業を取れない現状を表していると思われる。本研究の参加者はほとんどが共働きの父親であったことを考えると、イクメン、非イクメンにかかわらず、父親がもっと育児・家事に参加できる環境作りが社会に求められていると考える。

謝辞

本調査実施にあたり、アンケートにご協力をいただきました保護者様に感謝申し上げます。また、この状況下においてアンケートの配布及び回収にご協力をいただきました、あんず保育園、コベル保育園、ニコニコ桜保育園、聖和乳幼児保育センター、高須の森保育園、はらっぱ保育園、西宮市立瓦木北保育所、西宮市立成尾北保育所、西宮市立浜甲子園保育所、西宮市立用海保育所の園長先生を始め、先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- デッカー清美・丸山昭子 (2015). 父親認識に関する文献研究 日農医誌, 64, 718-724.
- 冬木春子・佐野千夏 (2019). 母親の就労が幼児の生活習慣に及ぼす影響 日本家政学会誌, 70, 512-521.
- 片桐真弓 (2016). イクメンの現状と課題：母親の語りの分析を通して 尚綱大学研究紀要, 48, 137-148.
- 数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘 (1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究, 7, 31-40.
- 岐部智恵子 (2016). 父親の抑うつ傾向と就学前の子どもの社会情緒的発達との関連：父親の育児参加との関連に着目して 小児保健研究, 75, 579-585.
- 岐部智恵子 (2018). 父親の抑うつ傾向の家族関係への影響：幼児期に着目した縦断的検討 小児保健研究, 29, 219-227.
- 厚生労働省 (2010). 「イクメンプロジェクト」サイトを開設しました Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/topics/2010/06/tp0618-1.html> (2021年8月27日)
- 小泉茅乃・齊藤 勇 (2015). 愛着傾向が青年期の人間関係に及ぼす影響について 立正大学心理学研究年報, 6, 75-88.
- 三井(中浦)由紀子・喜多淳子 (2005). 第1子の早期育児期における父親の家庭内役割行動及びその関連要因 神大保健紀要, 21, 63-76.
- 村田佐知子・山口孝子・堀田法子 (2016). NICUに入院した早産児に対する父親の愛着の変化とその関連要因 小児保健研究, 75, 40-46.
- 永井暁子 (2004). 父親の子育てによる父子関係の影響, 家計経済研究, 64, 55-64.
- 朴 志先・金 潔・近藤理恵・桐野匡史・尹 靖水・中島和夫 (2011). 未就学児の父親における育児参加と心理的ウィルビーイングの関係 日本保健科学学会誌, 13, 160-169.
- Parker G, Tupling, H, & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. British Journal of Medical Psychology, 52, 1-10.
- 笹川あゆみ・池松玲子・小関孝子・北原零未 (2015). 夫婦間の役割分業はなぜ変わらないのか：既婚女性へのインタビュー調査から探る アジア女性研究, 24, 1-12.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 相馬 深輝・武下 陽子・中村 康子・吉沢 豊予子 (2021). 共働きの父親、共働きの母親それぞれの成人愛着スタイルがコペアレンティングに及ぼす影響 日本母性看護学会誌, 21, 27-35.
- 杉山希美・小林和成・石原多佳子 (2019). 第1子を育児する父親の対処行動の変化と役割行動の関連要因：対処行動得点の増加群と減少群の比較から愛知県立大学看護学部紀要, 25, 89-98.
- 鈴宮寛子・山下 洋・吉田敬子 (2003). 出産後の母親にみられる抑うつ感情とボンディング障害 精神科診断学, 14, 49-57.
- 菅原ますみ・八木子暁子・託摩紀子・小泉知恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として— 教育心理学研究, 50, 129-140.
- 田所撰寿・大塚 周 (2015). 母親の自尊感情からみた親子関係の質に関する研究：愛着の形成に焦点を当てて 作大論集, 5, 295-309.
- 竹信三恵子 (2013). 家事労働ハラスメント—生きづらさの根にあるもの— 岩波書店
- 山川賀世子 (2006). 幼児の愛着の測定：Attachment Doll Play の妥当性の検討 教育心理学研究, 2006, 54, 476-48